

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	松本 久美子 2020年3月単位修得退学		論文題目	特別支援教育に関する「校内支援体制PDCA促進シート」の開発 －巡回相談員による特別支援教育コーディネーターへの支援を通して－	
審査委員	主査:	篁 倫子 教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 :	否
	副査:	岩壁 茂 教授		「否」の場合の理由	
	副査:	高橋 哲 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む	
	審査委員:	富士原 紀絵 准教授		<input checked="" type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある	
	審査委員:	坂爪 一幸 教授 (早稲田大学)		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている	
学位名称	博士 (社会科学)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている	
(英語名)	(Ph. D. in Social Science)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている	
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について	

## 学位論文審査・内容の要旨

我が国の特別支援教育がその場として通常の学級を含むと急展開されてから、小中学校では校内委員会の設置、コーディネーターの指名、巡回相談の実施など、新たな役割や機能が求められるようになった。しかし、学校現場での負担感や課題は未だ多くあり、特にコーディネーターの役割は当初より過重であった。松本氏は巡回相談員という立場で、小中学校における特別支援の推進と実践に関わってきた。本研究では、巡回相談員がコーディネーターや校内支援体制を効果的に援助することを目的とし、小・中学校の校内支援体制の現状把握に有用なPDCA促進シートを開発し、支援モデルを提案することを目的とした。

研究は5つの実証的・実践的研究、論文は8章から構成されている。研究Ⅰでは小・中学校のコーディネーターから自身の取り組みについての課題を自由記述で収集し、コーディネーターが抱える課題、巡回相談員がコーディネーターを支援する際の留意点を明確化した。続く研究Ⅱでは、校内支援体制の実状を把握するためのPDCA促進シートを作成し、小・中学校のコーディネーターに回答を求めた。インタビュー調査を基に配点基準を変更し、PDCA(計画:Plan, 実行:Do, 評価:Check, 計画の修正:Act)に「R実態把握:Research」を加えた6項目のR-PDCAサイクルと、実施レベルの3段階を掛け合わせたR-PDCA促進シートを完成させた。研究Ⅲではこのシートの妥当性をコーディネーターへの質問紙調査、並びに既存の校内支援チェックシートとの比較から検討した。その結果、PDCA促進シートの内容は校内支援体制の現状を的確に反映することが確認できた。さらに、学校現場において、R-PDCA促進シートの活用でコーディネーターが体験する気づきを明らかにするためインタビュー調査を実施し、KJ法で分析した(研究Ⅳ)。その結果、促進シートに回答することでコーディネーターは《課題》と《改善策》に気付くことが出来る一方、《成果》は経験と学校規模によることが示唆された。また、コーディネーターが荷の重さを感じることも語られ、巡回相談員から他校の成功事例を提示して進めるなど、コーディネーターを支援する必要も強調された。最後に小・中学校計4校を対象とした事例調査を行い、「R-PDCA促進シート」を活用することで実際に校内支援体制が改善するかを検討した(研究Ⅴ)。その上で巡回相談によるコーディネーター支援モデルを提案した。

本研究で開発したR-PDCA促進シートを利用することで、学校全体での情報共有を意識するようになること、その結果コーディネーターのコーディネーション行動が増加し、校内委員会の活性化や教員等の特別支援教育への理解が促進されること、各学校の特別支援教育の進捗度にかかわらず、改善の取り組みが継続されることが確認された。

第1回目の審査会では学校現場に対して幅広く、系統的に調査を実施し、質問紙調査、聞き取りインタビュー調査、実践的事例調査など、複数の研究方法を用いて行った研究として、博士論文としての水準に達していると評価された。一方、論文全体の構成、論述の仕方(説明不足、論理が不明、やや断定的な表現で根拠に欠くなど)、統計処理について問題が指摘された。第2回目審査会では指摘された点に加筆修正が加えられたことを確認されたが、文章が読みやすくなった一方、冗長な表現、説明のくり返しが多いことが追加指摘された。第3回審査会でおおよそ完成の域に達し、公開審査へと進めることとした。公開審査では、プレゼン資料は効果的で、説明も明快でわかりやすく、時間内に発表された。また、審査委員およびフロアからの質問に対して適切に応答していた。

本審査委員会は全会一致で博士(社会科学)に値する研究論文であると判断した。